

公案の研究に就て

日 種 讓 山

純主觀教と見らるゝ禪も、その宗教的機能を達成するには、種々なる機關が備はらねばならぬ、そして、それ等の機關が自然的に合整せられて、一個の統一體となりて、内的にも外的にも飛躍する所に、禪の宗教的機能が見出さるゝのである。所がその合整體には、合整の中心となりて、他をそれに合整する力と、合整せられたる者を生命つけて、それを全うし、それを躍動せしめて、各々の任務を達成せしむる力となる者がなくてはならぬ。之ありて始めて總ての機關は生きるものであり宗教的機能が顯現するのである。禪の所謂公案は、實に其作用を有する中心的ものであつて、之によりて總てが合整せられ、總てが生命つけられて、各のその作用を完全に達成する。此の意味に於て公案は禪の生命の主要分子であり、根基的主動體である。従つて禪の持續と發揚とは、一に公案にかゝりて、他は禪の宗教的機能を助成する補成機關に過ぎない。然し宗教に於ける補助機關は他の場合、譬へば疾病に於ける補助藥のやうに、簡易にしてまた安價なものではない、それは、そ

の補成機關によりて、其生命が現實化し、宗教的使命が達成し得るからである。けれども、補助機關の完備と發達とに従ひ、主動體の公案が輕視さるゝ場合がある、時にはまた、時代の潮流のみに囚れて、それに應動せんとする結果、それを無用視して一顧もなさない者もあれば、破壊を敢てせんと企るものもある。若し禪にして之を輕視し之を破壊せんか、その成立の根基はこゝに破壊せられて、生命を失ふに至るのである。内面的であるべき宗教が、現代の如く外形化し、外形の完整によつて使命を達成せんとする時代は、この病弊に墮在し易いのである。それで、禪としては外形の達成を忌むにはあらざるも、外形の達成は、内の生命の飛躍する所に顯現せる外形にして、始めて生命あり、價值があるのであるから、外形の達成は内の生命の延長又はその顯現たることを忘れてはならぬ。是れ古今の先徳が、公案の研究に生命を捨て、没頭した所以である。

二

眞實の意味より云へば禪の研究とは實際的の體驗であつて、體驗の外に眞の意味に於ける研究はない。従つて禪の講説と云へば、提唱の外に眞の意味を有する講説はない。然らば何ものを提唱し何物を體驗するかとなれば、それは先徳の提示せる公案である。公案の提唱及び體驗は、つまりは「佛心」の提唱「佛心」の體驗である。禪の枯弄と云ひ、評唱と云ひ、悉く公案であつて、他には何物も存在しない。古今の先徳が上堂又は小參に於て、學徒に示せる語を見ると、何も公案であつて、

公案以外には何等の説示も評唱もない。殊に佛教の典籍中最も數量に富めるものは、祖師方の禪録であるが、その内容は悉く公案の評唱や拈弄に過ぎない。又禪宗獨特の觀ある偈頌も經典に記されてある。それとは異つて、文字の裏面に公案の意義の含蓄してゐない者は殆んど無いと云つてよい。禪の教法は此の如く公案を以て動き、公案を以て一貫してゐるのである。若し之を他の教宗に比するならば、教宗には所依の經典あり、經典に依つて教相あり、その經典によるの教相は、所依の立脚を明にする者であつて、之によりて教宗は成立してゐる。禪は自ら教外別傳と稱し、經典は所依とせざるも、禪の公案は恰も教宗に於ける經典の如き觀がある。勿論其内容より云へば、各獨特の點ありて、悉く相一致する者にはあらざるも、全然異つたものであるとも云ひ得ない。それは「法」が先徳の體驗を透してその個性に盛られ、そこに「喝」や「咦」が顯現して居る所に「法」が獨自付けられて、獨自の法としての動きとなつて居るから、こゝに禪獨特の公案が顯はれ、そして禪の根基的主動體となり生命となつたので、禪は公案を除いては理解せられないのである。然らば公案とは如何なることを意味するか、又如何なる意味に於てそれが根基的主動體であるか、この二問題に就いて考察を進めねばならぬそれには先づ先徳の提示せる解説を點檢することが解答の一方法でありそして先徳の解説は今人の解説のやうに自己の學的意識によりて勝手に裁斷したのでないから、公案提示者の意志が能く酌まれてゐる故、先づ中峰和尚のそれを引用することにする。

或人問ふ、佛祖の機縁世に公案と稱する者は何ぞや。幻(中峰)曰く公案とは乃ち公府の案牘に喩ふるなり、法の所在にして王道の治亂實にこれに係れり。公とは乃ち聖賢其轍を一にして天下其途を同うするの至理なり、案とは即ち聖賢理を爲すことを記する正文なり。凡そ天下を有つ者は未だ嘗て公府なくんばあらず、公府を有する者は未だ嘗て案牘なくんばあらざるなり。蓋し取りて以て法となし而して天下の不正を斷せんと欲する者なり。公案行はるれば即ち理法用ひられ、理法用ひらるれば則ち天下正し、天下正しければ即ち王道治まるなり。

夫れ佛祖の機縁之を目けて公案と云ふも亦然り、蓋し一人の臆見にあらず。乃ち靈源に會し、妙旨に契ひ、生死を破り、情量を越えて、三世十方の開士と同じく稟る所の至理なり。且く義を以て解すべからず、言を以て傳ふべからず。文を以て證ふべからず、識を以て度るべからず。塗毒鼓の如し、聞く者皆喪す。大火聚の如し、之に嬰るれば則ち燎る。故に靈山に之を別傳と云ふは、之を傳ふるなり、少林に直指と云ふは、此を指すなり。南北宗を分ち、五家派を列ねてより以來、諸の善知識其所傳を操り、其所指を負ふ、賓叩き主應じ、牛を得て馬を還す頃において、麤言細語口に任せて捷出し迅雷の耳を掩ふを容れざるが如し。……世に長老と稱する者は即ち、叢林公府の長吏なり。其の燈を編し録を集むる者は、即ち其の激揚提唱の案牘を記するなり。……

夫れ公案は、即ち、情識の昏暗を燭す慧炬なり、見聞の翳膜を掲るの金篋なり、生死の命根を斷

つの利斧なり、聖凡の面目を鑑むるの禪鏡なり。祖意之を以て廓明にし、佛心之を以て開顯す。其の全超迥脫大達同證の要、此より越えたるはなし。……(中峰廣錄山房夜話上「原漢文」)

先徳の説示極めて明瞭、公案の眞意義説き得て餘蘊なしと云ふべきである。同時に公案が禪の根本的主動體、又は生命とも云ふべきことは明である。同時に又公案の使命も適確簡潔に示されてある。此によつて見ると、公案とは先徳の提唱せられたる正文と云ふ意味で、而も其の正文には聖賢の體得せる眞理が盛られて居るによつて、之を準繩として邪禪邪法を觀照して、其不正なる者を斷滅して正禪正法を傳へんとするに在ることは知り得らる。而して公案の作用は、法の本源に徹し佛祖の解脫境に現はれたる妙旨に契合し、佛祖と同一境涯に入らしめ、之を反面より云へば、吾人の自ら以て意識とせる情量を超越して、情量の上に築きあげたる生死の城廓を擊破して、無生死無分別智の眞智を得せしめて、佛と眉を結び神と肩を交へて遊戯自在の境に入らしむにあることは明瞭である。是れ中峰先徳が「情識の昏暗を燭するの慧炬なり、見聞の翳膜を掲るの金篋なり、生死の命根を斷つの利斧なり、聖凡の面目を鑑むるの禪鏡なり」と提唱せられし所以である。先徳が公案を提示して學者の悟境を検證せられし例は、禪録の在々處々に見る所であるが、卑近なる一例として禪門通途の話題に上る念佛上人と獨湛禪師との商量を記すると、禪師一日上人に問ふて曰く「師は何宗の行者なりや」、上人曰く「淨宗」、禪師曰く「彌陀の年幾干ぞ」、上人曰く「吾れと同じうす」、禪師更

に曰く「上人年幾干ぞ」、曰く「彌陀と同年」、禪師追究して曰く「即今彌陀何れの處にか在る」、上人は「黙然として左手を舉げられた」、以上の商量は詢に好箇の商量である。若しこの商量を淨宗の仁士より見たならば、如何にも妄談であり滑稽談であり、一笑にも價ひせずと思はるゝであらうが、機法一體と云ひ、信心獲得と唱擧する以上は、自己の上に顯現するのではなくては、一體でも獲得でもない、觀念の世界に影を宿して居るに過ぎない。是に於て禪は之れ聖なりや凡なりやと禪鏡に照して判別するのである。是聖凡を鑑むるの禪鏡なりと公案の一作用を拈提したのである。其他祖師の心境を朗然と鑑照し、自己佛心を開顯するの神祕的鍵は、實に公案中に秘められて居るのである。故に黃檗希運禪師は「既に丈夫の漢ならば箇の公案を看よ」と示されて居る。「看よ」とは看見の意味にあらずして、卻ち看破の意味である。それは公案に參究して其源底に達して始めて始めて可能であるから、元より安價な看破ではない。禪は此の如く公案の看破によりて始めて自己を看破し、自己の看破によりて公案の眞意義を看破し、公案と自己と不二一體となりて始めて看破せらるゝのであるから、禪の見性を見即性と云へる如く、不二一體となれるところに公案の眞生命は見出さるゝのである。

三

古來禪宗を一に座禪宗と云つた人もあるが、それは確かに禪の一面を道破せし命題である。公案の體達には必らず坐禪が伴つて居る。何故に坐禪が伴ふかなれば、それには先づ吾人の意識状態を

檢照して見ねばならぬ。吾人の現在の意識状態は波動形をなして居る、この波動形の高低によりて一切の矛盾が創爲せられて居る。例せば善の意志と惡の意志、普遍的意志と個別的意志、公人的意志と私人的意志、其他眞僞、正不正、生死迷悟と云へる如き二面の波動によりて、こゝに矛盾を生じ、人生の苦惱を生み出して居るのである。約言すれば意識の分裂によりて矛盾が出で、分化作用が進展的に行はれぬことによりて苦惱が生ずるのである。元來意識自身は一の統一體である。それが分化作用を起すことによつて進展するのである。宗教上の永遠の生命もこゝに存すれば、佛教哲學の不變眞如隨緣眞如もこの外にないのである。意識の分化は眞如の隨緣作用であり、意識の統一體は不變眞如自身である。而もこの二は一體の二面であるから、不變眞如の外に隨緣眞如なく、統一體の外に分化意識はない、分化意識が即統一意識であり、隨緣眞如が即不變眞如である。所が意識の分裂は、この統一體に整合作用の行はるゝ間は起らないが、其統一體が分化して整合作用の行はれざる場合に分裂は生ずる、何故に整合作用が行はれないかなれば、分化せし意識が客觀化して對象の形を持つた時、必ず相對的となりて、こゝに分裂を生ずる。よしやそれが、概念であらうが觀念であらうが、客觀化して對象となつた時は、相對的意識となりて生きんとする意識自身の機能は壓止せらるゝので、その機能を全うすることは出来ないのである。こゝに意識は死滅の状態に陥る。意識の苦惱はこゝに在る。この苦惱を救ひて意識を活現せしめんとする所に、坐禪の必要もあれば

使命もある。然るに單に坐することのみによりて、分裂をして分化に、分化をして整合的統一體に還元せしむることが可能であるかと云へば全然不可能にはあらざるも、それは絶大な意力を有する者にして始めて可能であつて、普通の人には殆ど不可能に近いのである。況や意識は常に對象を求めて生きようとし、進展しようとする、是意識自身の状態であると云つても可はない。この意識自身の微妙の作用を把握して、本然の體に還元せしめんが爲に公案が創成せられたのである。然しこれのみを以て公案の全作用と見るのは早計の甚しき者である。實は公案の一作用に過ぎないので公案としては第一歩の踏出しである。更に云へば、善惡生死昏沈掉擧の二元的對立的分裂的意識に一の公案を與ふると、意識はそれを自己の對象として、死滅状態より復活して活動を起し、知性が先づ先鋒となりて分別考慮の限りを盡して、對象の解決に全力を盡すのであるが、元より知性の解決し得べき性質の者でないから、科學哲學によりて精鍊せられた知も、遂に破産の境遇に墮して影を潜むと、意志が第二軍となりて、銳意に突進して正面抗擊に移り、遂には對象と意志とが入り亂れて混戦の状態に墮して、進退兩難に陥る時、更に捨身になりて組打の状態に移ると、意志と公案とがからみ合つて一體となり、何れが意志であるか何れが公案であるか區別し難き場合に到達する、之を大疑團と稱す、之は禪の第一關を破る鐵團であるが、之が極處に達して爆發するとき意識全體は復活する、是に於て始めて知情意の三は一の統一體のうごめきであり、分化であり、平等體中の

差別であり、一切の差別は平等體のうごめきであり、分化であつて、生死は佛の生命であつたことが明瞭に悟得せらるゝのである。同時に又その平等體は時間空時を没して、普遍的大我であつたことも知り得らるゝ、而して復活後の知情意は現常のそれと異り、統一體の現れであるから、その基本に一の統一體を有し、統制ある知情意となつて居るから、相互の矛盾と本末の障壁は全く除かれて、湛然圓寂にして而も活達無碍の意識に轉換して居るのである。中峰先徳の全超迥脫大達同證の一部分は確實にこゝに把握せらるゝのである。

以上の説明中現常の意識状態及び公案検討中又は復活後の意識状態の説明は極めて約言してわづかに、其一端を記せしに過ぎないから快明を缺き、闇中摸索の如き觀なきにしもあらざるも、一は早急の場合なると、一は坐禪に於ける心理現象の研究が主題にあらざるため、概説に留めたので不完全なるは寛恕を乞ふの外ない。然し坐禪に公案の件ふ所以と、公案の體現には坐禪の缺くべからざる所以は、大略明瞭となつたと思ふのである。此の如く禪の公案は一面より云へば意識轉換の要求によりて現はれ、又一面より云へば悟後の機用を完成するために、差別の法門を體現せしむる爲に現れたる者であるから、つまりは根本智と後得智、差別と平等、自覺と他覺との兩面を達成せしむる爲の者であつて、公案が禪の根基的主動體なる理由も即ちこゝに存するのである。

四

佛敎の諸問題の中、普通の立場から觀察して、禪の公案ほど不可解な者はないであらう。そしてその不可解な公案は、全く師家の室内の參究題目とのみせられて、室内に封じ込まれて、室内の參究のみに制限せられた形となつて居る。それは室外の研究の對象とすべき性質の者でなく、實參實究以て悟視すべき者であるとの理由によつて、自然的に室内に封入せられて、室外の研究を不可能視し、外道視するやうになつたのであらう。勿論禪の體驗的立場及び公案の眞義より云へば、元より當然であつて、そこに異義はないであらうが、それはあまりに傳統的精神に支配せられ、禪本來の自由な立場を忘却して、擔板漢の弊に墮して居るではなからうか、特に今日の如く知識の進歩せし時代に、禪のみ舊習を墨守して、それ以外に出でないことが許さるゝであらうか、恐らくそれは許されないことであらう、既に門外の學者によりて禪の公案が研究せられ、公表せられて居る書も二三に止まらない、此等は皆出來得る限り學的に研究して、その眞理を明にせんとせしものである、して見れば、我禪門内より神祕の幕を切り落して其眞實性を明示することが、現代的の動き方と見なければならぬ、此の意味よりして吾人は可能な範圍に於て學的に研究して、其眞理を明かにし其價値の表示と共に、禪的解脱道への門を打開して、求道者に進路を示すと同時に、禪に對する疑念を除却することが現代禪者の任務であらうと思ふのである。かく云へば守株的な人は必ず云ふであらう、禪は學的に研究し得べき性質の者にあらず、只管打坐以て實參すべき者であると。然り禪は

打坐實參すべき者である。然れば則ち其打坐實參の外進路なき理由を學的に明示するのも、是れ一の禪の現代的研究であり、又體驗者自身が自己の體驗せし公案を、學的に可能な範圍に於て明示することも、是れ亦現代的研究の一である。或は一則の公案に於て其體驗の方法と眞理性を豫示すべきことも、亦現代的研究の一である。此の如く思考し來る時は、學的に研究の可能な圍範は多々存在するのである。例せば圓悟の碧岩集に於ける評唱の如き、萬松老人の從容錄に於ける評唱の如き其他槐安國語、無門關、五家參詳要路門の如きは、先徳が時代適應の提示をなして學者の參究の便に供した者である。然れば則ち現代は現代として適應の提示の不可能なる理由は認められぬ。文學的特殊味より云へば、漢文にはその特殊味ありて、禪の提示に適應な點なきにあらざるも、それは問題とするほどの重要味を有して居ない、既に邦文に書かれたる法語類の多數に存在する點より見ても、現代適應の提示の不可能なる理由は認められぬのである。故に吾人は守株の弊を破り、舊習を越えて現代的に可能なる範圍に就いて之を表明したいと思ふのである。

五

元來禪の公案は頗る高踏的であつて順次的でない、従つて之を論理形式より見る時は、全くそれ等の形式を離れた説示である、甲の問に對して乙が答ふる場合に、東を問へば西を以て答へ、又は南北を以て答ふる如きことが少くない、所謂木につぐに竹を以てする如きことが枚擧に遑なき迄禪

録の中に記されて居る。如何なる理由によつて非論理的形式を執つたのであらうか。禪の公案を解するに最も必要な點はこゝに存在する。論理形式はもと物自體でなく、知自體ではない、何等かの對象を持ち何等かの概念を持つ、對象及び概念の世界には、知の自動的光はない。換言すれば知自體の自動でなくて他動であるかぎり、普遍性や自由性は全く殺却せられて、唯形式より形式に移り型より型を追ふて、自由の分はないのである。是に於て禪は概念を越え、對象を越え、知自體の自動的機用を把握せしめ、實踐せしめんが爲に、高踏的な立場より反省を促し、又は概念知を一刀下に截断せんとするのである。而して甲を自由なる知者たらしめんとするに過ぎないのである。更に云へば日常生活の差別的事象に即して、平等的普遍的本體を體認せしめて、差別的概念的偏執知を解放せしめて、差別自身が平等のうごめきであり、生死自身が涅槃の妙境であることを得せしめんが爲である。故に禪の知には相對も絶對もなく、任運法爾の光あるのみである。相對といひ絶對といひ共に概念の上に築造した哲學的概念の塔に過ぎぬ。従つてこの塔はもと相對絶對の二を越えた地上に立てられた概念的遊戯の塔たるを知らねばならぬ。二層三層と築きあげて、其高さに見とれ其視界の曠廓なるに驚きて大地を忘却したのが佛教の哲學者である。古來佛教哲學が、眞如又は法性にて行き詰りとなつたのはこれが爲めである。解脱の爲めの眞理探求が、眞理に纏傳せられて自由を失へるのも之が爲めである。こゝに一轉機を與へて、眞理の纏傳を離れ、哲學の高塔を下りて

沃野天に連なる大地に自由に舞踏せしむる爲に、非論理的形式を取りて、高踏的な立場より突き落す手段を取つたのである。是れ木につぐに竹を以てするが如き問答を生み出した所以である。若し禪知の立場即ち地上自身より云へば、哲學の眞理塔も、天上の樂園も、如來の淨土も、藝術も、一の舞踏として創爲したのであるから、創爲も可なり、不創爲も可なり、何等停住する所はないのである。無碍の世界、永遠の世界は、實にこゝに存在して、莊嚴極まりなき者である。